



BHUTAN

学校名：中央大学杉並高等学校

氏名：大塚 圭

[担当教科：外国語(英語)]

- 実践教科等：  
総合的な学習の時間
- 時間数：7時間
- 対象生徒：高校1年～3年
- 対象人数：24人

### [1]単元名

高校生のための国際協力入門

### [2]単元の目的/目標(背景を含む)

- ・貧困や南北格差などの地球規模の諸問題を認識する。
- ・開発をめぐる問題の原因を考え、世界のつながりを理解する。
- ・地球社会のさまざまな課題を解決するために、相互に協力しあう態度を養う。

### [3]単元の構成

時限	本時のねらい、テーマ	学習活動・学習内容	使用教材	評価の観点と方法
1	【国際協力を定義する】 国際協力は、一方的な支援ではなく、日本人の暮らしを支えるために必要な手段であるということを理解する。	・フィリピンのスラムに暮らす人々の生活を通して、国際協力について考える。 ・資料を使用して、日本と開発途上国の関係について気づいたことをワークシートに記入する。 ・「依存大国日本」を見て、日本と開発途上国の相互依存関係を理解する。	・パワーポイント ・資料 (日本・途上国相互依存度調査) ・ワークシート ・映像 (依存大国日本)	学習活動の観察 ワークシートの記述の確認
2	【世界の現状を理解する】 「世界がもし100人の村だったら」に描かれた現実を体験し、世界の現状を認識する。	・シミュレーション(疑似体験)を通して、貧富の格差を知る。 ・貧困や南北格差についての背景や原因を考える。 ・「世界がもし100人の村だったら 総集編」を読んで、世界の現状について理解を深める。	・「ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら」	学習活動の観察
3	【国際協力の現場を知る】 青年海外協力隊OBの体験談を聞き、国際協力の仕事について考える。 講師：浦 輝大さん	・青年海外協力隊(バヌアツ)での体験を通して、日本とバヌアツの価値観を踏まえた国際協力を考える。	・パワーポイント ・映像	感想シートの確認
4	【支援のあり方を考える】 「援助する前に考えよう」のワーク1(一枚の看板)を通して、援助する側やされる側の心理を考え、国際協力についての基本的な理解を促す。	・アイ子の立てた一枚の看板を見て、タイの小学校に寄付するかどうかを話し合う。 ・アイ子の活動の是非について議論する。 ・アイ子の活動がよりよいものになるためのアドバイスを考える。	・「援助する前に考えよう」 ・パワーポイント	学習活動の観察 ワークシートの記述の確認
5	【支援策を考える①】 ブータンのイメージを膨らませ、国家政策である国民総幸福量(GNH)を理解する。	・ブータンの位置やその近隣諸国を確認する。 ・写真(6枚)を使用して、ブータンについて気づいたことを話し合い、イメージを膨らませる。	・パワーポイント ・ブータンの写真 ・GDP, HDI, GNHの国別ランキング	学習活動の観察

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・国民総幸福量の概念を導入するために、GDP、HDI、GNHのランキングを比較する。</li> <li>・GNHの9つの指標について具体例を考え、GNH相関図を完成させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・GNH相関図</li> </ul>	
6	【支援策を考える②】 ブータンで実施されているJICAプロジェクトを参考に、具体的な支援策を考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クイズ形式で実際に行われている5つの支援プロジェクトを紹介する。</li> <li>・5つのプロジェクトについて優先順位を決定する。</li> <li>・最も重要であると思われるプロジェクトについて具体的な支援策を考え、ワークシートに記入する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パワーポイント</li> <li>・ブータンの写真</li> <li>・ワークシート</li> </ul>	学習活動の観察 ワークシートの記述の確認
7	【支援策を考える③】 支援策について自由な対話をし、より多くの意見を共有する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ひとつのテーブルを囲むように座り、各支援策についての感想やアドバイスを模造紙に記入する。</li> <li>・模造紙に書かれた意見を共有する。</li> <li>・最も印象に残った支援策を投票で決定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パワーポイント</li> <li>・模造紙</li> </ul>	模造紙の記述の確認 支援策の発表

**【4】授業の詳細 ここではブータンを取り扱った5、6、7時限目のみを取り上げる**

〈この授業では、4人グループを6つ作り、すべての活動は、グループ単位で実施されている〉

**5時限目：【支援策を考える①】**

まず、アイスブレーキングとして、グループで南アジアの7ヶ国(インド、バングラデシュ、ネパール、パキスタン、スリランカ、モルディブ、ブータン)を話し合い、授業を活性化するための導入とした。地図だけでなく国旗のヒントを参考に南アジアの国々をクイズ形式で確認した。

次に、支援策を考える国は、ブータンであることを発表し、今回の授業の目標は、ブータンのイメージを膨らませるとともに、ブータンの国是である国民総幸福量(GNH)を理解することであると伝えた。

ブータンのイメージを膨らませるためにフォトランゲージを行い、写真は、首都ティンプーの街の様子、ブータンの農村風景、ブータンの人々の生活、学校に通う子どもたち、チョルテンの周りを歩く人々、バザールの様子の6枚を使用した(添付1を参照)。各グループ1枚の写真について感じ取れるものや気づいたことを話し合い、その後、写真について補足的な説明を加えた。以下は、チョルテンの周りを歩く人々の写真について話し合ったグループの記述と6枚の写真についての補足説明である。

**生徒の記述**

- 服が独特である
- 宗教色が強い
- 同じ方向に歩いている
- 何の建物か不明
- 山に囲まれている
- 大人が多い
- 朝または夕方である



.....  
**ココがポイント!**  
 .....  
 フォトランゲージで使用する写真は、生徒が最低3つのポイントを容易に想像することのできる写真を選択する。  
 .....

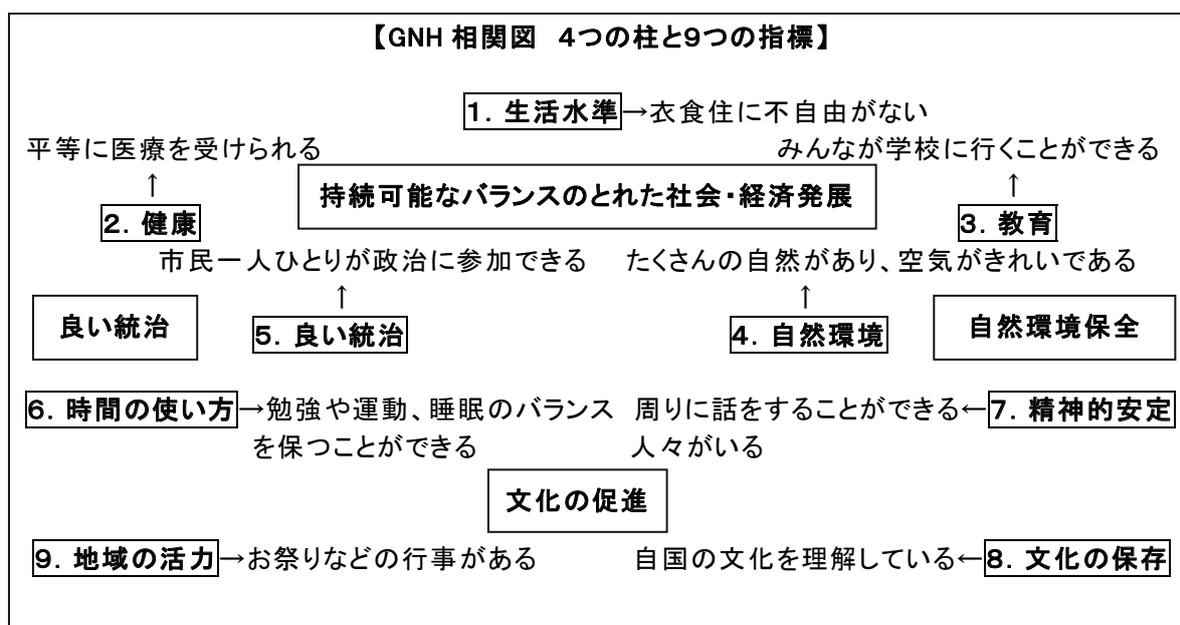
**(補足説明の内容)**

首都ティンプーの街の様子：山間に囲まれた小国、人口約70万人、九州とほぼ同じ面積  
 ブータンの農村風景：森林の60パーセントを保護、人口の6割が農業に従事、米が主食  
 ブータンの人々の生活：男性はゴ、女性はキラという民族衣装の着用、唐辛子と乳製品の使用  
 学校に通う子どもたち：識字率60%、小学校以前から英語教育、国王に対する絶大な支持  
 チョルテンの周りを歩く人々：チベット仏教を国教としている唯一の国、生活にチベット仏教の影響  
 バザールの様子：ダショー西岡の栽培方法の指導、日本から多様な野菜を導入

次に、ブータンの国家開発計画の基本理念を理解するために、国内総生産(GDP)、人間開発指数(HDI)、国民総幸福量(GNH)のランキングを提示し、日本とブータンを比較しながら、何のランキングを表しているか話し合った。日本は、GDP、HDI、GNHと順位が下がっていく一方で、ブータンは逆に順位が上がっていくので、GNHが経済規模とは異なる指標であると理解するグループが多かった。

最後に、GNH 相関図を用いて、GNH の4つの柱と9つの指標について説明した。3つの指標(生活水準、健康、良い統治)について例をあらかじめ提示し、残りの6つの指標については、生徒たちが具体的な状況を考え、発表した。人々が9つの指標について幸せを感じることができれば、4つの柱の目標を達成し、GNH の向上につながるという、ブータン独自の開発理念を尊重した支援策を考えなければならないことを伝え、まとめとした。

国内総生産(GDP)		人間開発指数(HDI)		国民総幸福量(GNH)	
順位	国	順位	国	順位	国
1	アメリカ	1	ノルウェー	1	デンマーク
2	中国	2	オーストラリア	2	スイス
3	日本	3	オランダ	3	オーストリア
4	ドイツ	3	アメリカ	4	アイスランド
10	インド	12	日本	8	ブータン
26	台湾	26	シンガポール	15	オランダ
50	ルーマニア	50	ルーマニア	23	アメリカ
88	エチオピア	88	コロンビア	82	中国
121	カンボジア	101	中国	90	日本
166	ブータン	140	ブータン	125	インド
185	ツバル	187	コンゴ	178	ブルンジ



**生徒が完成させた GNH 相関図**

(生徒の感想)  
 ブータンという国は、ニュース等の報道で知っていたけれど、実際の生活の様子を見るのは初めてでした。日本に暮らしている私たちが考える「幸せ」や「豊かさ」とブータン政府の目指すものには、少し違いがあるかもしれないと思いました。支援をするにあたって、まずはブータンの目指す「幸せ」を理解することが大切だと分かりました。そして、4つの柱と9つの指標について考えてみると、身近な部分でも感じるがありました。

## 6 時限目：【支援策を考える②】

まず、実際にブータンで実施されている支援プロジェクトをクイズ形式で出題した。グループで写真2枚をヒントにどのような支援が行われているのか話し合い、その後、なぜそのような支援が行われているか補足的な説明を加えた。出題したクイズは、JICA が実施している5つの支援プロジェクト(地方電化促進プロジェクト、生ゴミを肥料化するためのコンポストプラント、メディア支援、体育教員派遣、職業訓練校の質的強化プロジェクト)である(添付2を参照)。

## 生ゴミを肥料化するためのコンポストプラント

### クイズの手順

1. 1枚目の写真を提示する
2. 何の支援か早押しで答える
3. 2枚目の写真を提示する
4. 何の支援か早押しで答える
5. 支援理由を説明する



(支援を必要とする理由)

地方電化促進プロジェクト・・・ブータンの地方農村部の電化率は、54%だが、ブータン政府は、2013年までに全国100%の電化を目標に掲げている。

生ゴミを肥料化するためのコンポストプラント・・・生活スタイルの変化に伴い、ゴミの増加が問題となっている。分別後の生ゴミを堆肥化することは、農業国のブータンの人々にとって受け入れやすい支援である。

メディア支援・・・テレビやインターネットは、地方の人々にとって、情報を得たり、知識を身につけたりする手段である。都市部と農村部の情報の格差をなくすることができる。

体育教員派遣・・・体育教科は2000年に正規教科となったが、教科として行われていない学校も少なくない。開発途上国では、情操教育のないカリキュラムも多い。

職業訓練校の質的強化プロジェクト・・・失業率は3%強とされているが、都市部の若年層に限ると10%を超える。水力発電所建設が行われているため、労働需要のある電気分野に力を入れて支援している。

次に、提示された支援プロジェクトについてグループで優先順位を決定した。4つのグループは、地方電化促進プロジェクトを、2つのグループは、職業訓練校の質的強化プロジェクトを最も必要な支援であると考えた。



優先順位を話し合う生徒たち

### ココがポイント!

優先順位を決める過程で、ブータンの人々にとってという支援される側の視点を持つことの重要性を促す。

(支援プロジェクトを選んだ理由)

#### 地方電化促進プロジェクト

- ・電気は、人々の生活水準を向上させるだけでなく、産業の発展にも欠かすことのできないものである。
- ・ブータン政府は、2013年までに100%の電化を目指しているので、早急に対処しなければいけない。

#### 職業訓練校の質的強化プロジェクト

- ・ブータンが自立するためには、人材を育成することが大切である。
- ・電化やゴミ処理も技術を必要とするので、人材育成(職業訓練)が優先である。

最後に、グループで選んだ支援プロジェクトについて具体的な計画を考え、ワークシートに記入した(7時限目を参照)。ワークシートは、ブータンの現状を理解し、その原因を探り、その上で、オリジナルの支援策を考えるものである。グループによっては、話し合いが進まなかったこともあり、地方電化促進プロジェクトについての例を提示した。授業内で終わらないグループは、例を参考に次回までの課題とし、次の授業では、各グループの支援策を発表することを伝えた。

(生徒の感想)

不足している全てのものを支援しようとするときりがなくなってしまうため、何をどのように支援するかを選んで決めるといことが大切だと思いました。でも何が一番優先すべきなのか考えるのは意外と難しかったです。漠然と「支援する」と考えるのではなく、何をどのように支援して、またどのようなことが期待できるのか、具体的に良く考えることが重要だということが分かりました。

### 7 時限目：【支援策を考える③】

前回の授業で各グループが課題として取り組んだ支援策をワールドカフェ形式で共有した。ひとつのテーブルを囲むように座り、中央に模造紙と各グループの考えた支援策のワークシートを置いた。自由に意見交換をし、時々他のグループのメンバーとシャッフルしながら、各自が模造紙に意見を記入していった。ワールドカフェは、以下のような手順で進めた。



#### 進め方

1. 自分のグループで支援策を考えた感想を話し合い、模造紙に記入する。
  2. 各グループから一人を残して、それ以外の人とは他のグループのテーブルに移動する。
  3. テーブルに残った人は、他のグループから来た人に支援策を説明する。
  4. 新しいメンバーは、支援策について感想を話し合い、模造紙に記入する。
  5. 数回移動を繰り返した後、テーマを支援策についてのアドバイスに変え、模造紙に記入する。
  6. 自分のグループに戻り、模造紙に書き込まれた意見を共有する。
- 最後に、すべての支援策を見学する時間をつくり、その後、最も印象に残った支援策に投票をした。次のワークシートは、最も投票の多かった職業訓練の支援策である。

.....  
**ココがポイント！**  
 .....  
 意見やアイデアをまとめるのではなく、より多くの意見を共有できる雰囲気を作よう心がける。  
 .....

グループメンバー

文字は、大きくはっきりと丁寧に書くこと。提出日：12月14日（金）

## ～ブータンを支援しよう～

**職業訓練の質的強化**

現状

ブータンでは、急速な人口増加が続いており、若年層の増加による雇用問題は深刻化している。ブータン全体の失業率は3%強とされているが、これを都市部の若年層に限ると10%を超える状況にある。

考えられる原因

ブータンでは就職できる職種が限られていると考えられる。  
 また、若年層においては職業能力不足が原因であると考えられる。

プロジェクト名

## プロジェクトPW

考えられる政策

職業体験を含む講演会を実施し、同時に教育者の育成も行う。  
 また、中学・高校・大学で職業教育も行う。

GNHの9つの指標との関係

GNHの指標  
 生活水準、教育、時間の使い方、精神的安定

GNHの指標との関係

講演会、中学・高校、大学などの教育の場において、職業能力を高めることにより、様々な職種への就職が可能となり、生活水準が向上すると考えられる。個人においては、職を得ることにより精神的安定が得られ、社会的な時間の使い方を学べると考えられるため、ブータン政府の国家政策と交差することができる。

(生徒の感想)

支援策は、私たちのグループでは一時的な支援ではなく、その支援が終了したあとも、ブータンの人々だけで自立した生活ができるような政策を考えるようにしました。職業訓練校の設置や地方を発達させることで都市部の過密化を分散させようと考え、自分が本当に支援をしているような気持ちで取り組むことができました。

### 【5】児童・生徒の反応/変化

7回の授業を通して、生徒たちの国際協力についての知的理解だけでなく、日常生活における態度の変容を見ることができた。テレビなどの報道で開発途上国について興味を持ったり、ユニセフなどの街頭募金に耳を傾けたりする心の変化である。さらに、授業実践の題材がブータンであったため、物質的豊かさではない「幸せ」を考えるきっかけになり、より国際協力を日常生活と結びつけて考える機会になったようである。ある生徒の感想の抜粋を紹介する。「相手の国をよく知って援助をするということを日常生活に置き換えれば、周りの人を手伝うときに、おせっかいのようにならない、ということになる。こ

のように、国際協力と日々の生活を結びつけて考え、自分自身を見直す良い機会になった」。

### **〔6〕授業実践の成果と課題**

生徒たちが開発途上国を遠い世界の特別な存在ではなく、身近に捉えられるようになったことは嬉しい成果であった。また、日本と世界のつながりを認識し、世界を体感する機会を与えるという目的は、ある程度達成することができた。しかし、国際理解教育/開発教育の手法を取り入れた授業の経験不足もあり、ファシリテーターとしての役割に課題が残る。生徒たちからより多くの意見やアイデアを引き出すことができれば、より深い視点で生徒に刺激を与えることができただろう。

また、ブータンの支援策を考えるときに、「幸せの国に支援は必要なのか？」という疑問を払拭することができなかった。ブータンの幸せなイメージだけでなく、97%が幸せであると答えたアンケートの問題点や国家予算の4割を支援に頼っているなどの情報を明確に示す必要があった。

### **〔7〕参考文献(引用文献・参考資料)**

- ・『ひとりじゃ生きられないニッポン』ひとりじゃ生きられないニッポン制作委員会、文化工房、2010年
- ・『ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら』開発教育協会、2003年
- ・『「援助」する前に考えよう』開発教育協会、2006年
- ・『「共に生きる」をデザインするグローバル教育』全国国際教育協会、メディア総合研究所、2012年
- ・『国際協力と開発教育』田中治彦、明石書店、2008年
- ・『幸福立国ブータン』大橋照枝、白水社、2010年
- ・『美しい国ブータン』平山修一、リヨン社、2007年

### **〔8〕使用教材(写真/図などの実物)**

#### **添付1(フォトランゲージ)**



首都ティンパー



ブータンの農村風景



ブータンの人々の生活



学校に通う子どもたち



パズルの様子



地方電化促進プロジェクト



メディア支援



体育教員派遣



職業訓練校の質的強化プロジェクト

### **〔9〕教師海外研修を終えて(感想・今後の展望)**

教師海外研修における一番の成果は、自分自身の授業の幅を広げることができたことである。国際協力の現場を肌で感じ、国際理解教育/開発教育の手法を学び、さらに授業で実践できたことは、大変貴重な経験となった。生徒たちに、「国際社会に参加できる能力と態度を養う機会」を与えるという目標を達成するための第一歩となった。今回は、英語科目での授業ではなかったが、今後は英語教育の枠組みの中で、国際理解教育/開発教育の手法を取り入れていきたいと考える。生徒たちが共通語としての英語を使用して、先進国だけでなく開発途上国で活躍するためのきっかけを提供できれば幸いである。